

革新的技術創出への挑戦 — 研究開発の進むべき方向 —



山添 勝 (やまだ え まさる)

富士電機アドバンステクノロジー株式会社
取締役社長

新年明けましておめでとうございます。

富士電機アドバンステクノロジー株式会社は富士電機グループの研究開発会社として設立され4年が過ぎました。この間、事業会社に直結した開発や新事業に結びつく研究、グループ全体にかかわる基盤・共通技術のセンター機能、などで富士電機グループの発展に貢献してきました。

2007年を振り返りますと、富士電機システムズ株式会社の太陽電池事業立上げ時に量産技術の改善に取り組むとともにりん酸形燃料電池の事業化に向けた開発を進めてきました。また、パワーエレクトロニクス分野、生産技術分野、メカトロニクス・センサ分野、非接触ICカード分野などで成果を上げることができました。一方、事業と研究開発の一体化を強化するために半導体技術および磁気記録媒体技術を研究開発していました半導体研究所とストレージメディア研究所の機能を富士電機デバイステクノロジー株式会社に移管するとともに将来技術に対するアクティビティを維持するために先端デバイス研究所を新設いたしました。また分野別のプラットフォームの構築を推進するとともに基盤技術のセンター機能を強化し、EMC技術などで事業会社への技術支援を行ってきました。

2008年は富士電機グループの現中期経営計画の最終年度に入りますが、当社は研究開発会社として次期中期経営計画に向けて技術蓄積を行う年として位置づけています。研究開発で確実な成果を得るためにはテーマの選定から始まる研究開発マネジメントが重要です。従来マネジメントシステムをさらに強化・変革し、研究開発効率の向上を目指します。社外の研究機関との共同研究など、いわゆるオープンイノベーションにも積極的に取り組んでいきたい

と考えます。研究者の柔軟な発想による研究開発の活性化も重要な課題として位置づけています。研究開発は人材が重要な要素になります。国内外の大学への派遣やキャリア技術者の採用など積極的に行い、研究開発者の質と層を充実していきます。

具体的なテーマとしては、固体高分子形燃料電池の高信頼化、フィルム型太陽電池の高効率化、アクティブマトリックス方式有機ELの開発、など特徴ある研究開発を加速していきます。材料分野をはじめとする基礎研究を重視し強化するとともに、社会のメガトレンドから中長期的な視野に立ったテーマを抽出し、研究開発に取り組んでいきます。コア技術から見れば、MEMSと半導体との融合技術、環境技術、分析・評価技術、シミュレーション技術、など特徴あるテーマに取り組んで事業に貢献していきます。

事業会社に直結する研究開発はそのスピードが事業の成否に大きくかわります。事業会社と一体になった研究開発に取り組み、その成果をタイムリーに市場展開することにより各事業会社を通じて社会に貢献できることを目指します。

富士電機アドバンステクノロジー株式会社のミッションは、技術で社会に貢献することです。コア技術を持った専門技術者集団として、次期中期経営計画に向けた技術蓄積、グループ内でのテクニカルリーダーシップの発揮、基盤・共通技術のセンター機能のさらなる強化、技術の水平展開などを基本とし、中長期的な基礎テーマにも積極的に取り組み、差別化技術で富士電機グループに貢献する所存です。